

津軽弁 村の笑い話

シヤンボ (石鹼)

昨夕、孫を連れて銭湯にいったら、「マゴヅヤ」のオドもきた。オドは七十三才で小柄だが「モノ」は太く長く膝まで垂れ下がり、歩くとヨロタがすり切れるので、いつもビニールテープで左右に動かぬように引っぱり、真中の一本で下腹部まで吊りあげ、くくりつけていた。

私は思わず「サスガー」と感嘆の声を発したら、オドは、くの字なりに曲った「モノ」を手のひらにのせ、にっただ笑った。

オドが坐ると「モノ」はヨロタの下をくぐり、尻のくぼみの辺りから灰色の面を怒った蛇のようにもちあげて、オドの背中をじっと眺めているようだ。

と、そのとき五ツになる孫がこれを見つけ「おじいちゃん、あそこさ、石けんおじでら」と私の耳にささやいた。

「拾ってこなが」と云ったら孫は急ぎオドの「モノ」

をぎゅつとにぎりしめた。私は一瞬どうなることかと、目をつむる。

しかし、オドは少しも騒がずゆっくり孫を振り返り、「オニイチャン、ソレ、シヤンボでねえ、ナマズだね」と云ったので「モノ」は孫の手を離れ、スルスルとオドのヨロタの下にかくれた。

(森平)



見当違い

日本海地震のときでした。
血圧が高くて通院していたガンチョのジサマ、昼近く病院からの帰り道、友人の多一の家で一服つけていた。そのとき、グラグラッと地震が襲った。

「ワ、アダテマタジャ。物が動いで見える。もうマイネ」
ジサマは力なくつぶやいて、うつぶした。
驚いた多一

「ジサマ、ジサマ、地震で家、ゆれでらダネ 早く逃げべし」

むっくど起き上ったジサマ

「ホントネ地震ダナ、ソヘバよかった、地震ダバオツカネ
グネス、逃げネ」

「ナシテヤ」



「孫サ嫁コ貰ってガラ、アサ、ヨマ、毎日二階で地震起キデ、オドガルネ、地震ダバ、ナンモ、オツカネグネエ」

ジサマは声を低くして、親指を天井に向け、

「ソレニシテモ、オメダチの息子、昼間ナガガラ、ケツパルナア」

(森平)

特別寄稿

スキー場について

佐野 駒三郎

私たちが小さい頃は誰もスキー場とは呼ばないで二ツ森・二ツ森と呼んでいた。それが津鉄が通りスキー場となってから、スキー場と呼ぶ様になった。昭和五・六年頃と思う。

二ツ森と呼んだ理由があったのです。二ツの古墳があったからです。スキー場から喜良市道路に面した所に、二ツの立派な古墳があったから二ツ森と呼ばれて、何千年か何百年も続いて来たのです。

一ツは無智蒙昧な土建屋に依って根こそぎ掘られて金に代えられてしまったが、埋っていた骨及入れ物を調べることにより年代が分かるのに、大変な事をしてくれたものである。

幸いにして他の一は(女の古墳)残されているが、こわされた古墳は誰が見ても一目で、古墳と解かる立派な物であった。筆者五十年前ちよっと掘ったが固くて、スコップが立たなかつたので中止した経験を持っている。

次に堅穴住居であるが、あそこには約二十近いのが群をなしてならんでいる。その真中ごろを拙者と当時嘉瀬小の先生で齊藤伝先生とで一ツ掘ったアトがある筈です。

あれだけ群をなしているのは大変珍しいことです。その堅穴の終りの方が四つ程に観音様が坐っております。何も知らないで丁度よい円まで平だ所としてやったものと思えます。古墳が二ツなのに堅穴が二十ぐらいでは大変少ないわけで、どうしても五十近くの堅穴がなければならぬと考えます。かりに五十でも四人で二百人ですから、それぐらいの人数が生活したと考えられています。

それで真中のお堂やその東等にあつたと思われませんが、こわされてしまったと思えます。

次に、観音様の水ですが、縄文人の住んでいた頃以前から今の様に豊富に湧いていたと思えます。縄文人の生活している場所を見ると、高く見晴らしのよい所、それに食糧が得やすい所、きれいな水が豊富な所と定めています。それが二ツ森が丁度適合しているわけです。

それで食糧ですが、私が考えるに、水を利用して穀物を栽培していたのでないか、あのせまい土地で大人数が生活していくには、どうしてもそれしか考えつかぬ。

次に、スキー場から奥へ行った所に三ツ森がある話を聞いている。もしもそれが古墳だとすると、第一に其所に泉がなければならぬし、住んだと思われる堅穴が少なくとも五十以上なければならぬ。

そして附近で一番高く景色の良い所と云う条件を満たして、その上古墳が三つと云うことになる。これも若い人の研究課題である。もしもそれが事実とせば、津軽為信との戦いに勝った八重佐助の墓とも考えられる。大きな謎を秘めた幻の古墳とも言える。

次に堅穴の掘り方を述べる。



上古墳であることは県に於ても第一号です。私の八十年の歴史の間に新聞にも出た事もないし、古墳があることはスキー場が最初です。その意味に於てもなくなった古墳が惜しい。



薬師コ流れ抄

第一章

嘉瀬薬師コの入口に磯崎宮と記名された、石柱が建っており、津軽夷神異文抄によれば、荒磯神社、洗磯神社、磯崎神社等は荒吐族の残りなり。大昔は、殯りの期間に遺体をさらし腐蝕させておくための場所でもあったとも云われています。金木町の嘉瀬磯崎宮や柏木部落の磯崎神社は荒吐神を祀った社らしく、荒磯神社、磯崎神社の如く磯がつく神社は荒吐族から安東が祀りたる神社といわれる。

吾が津軽は支那国王帝の郡公子が殺され、その難を海に脱したる晋の民は大挙して潮流に乗漂して津保化族に貢物を献じて住居を許可にいただき男女も婚じ茲に荒吐族と称す一族誕生也り。磯っていうのは今は海岸の磯のことだけれど、昔は石のこ

とであると書かれている。

現在の磯崎宮のお祭り日は薬師神社と書かれた幟旗が立ち七月七日の宵宮で賑う。第一集かたりべ嘉瀬薬師神社境内組石、金木高校教諭川村先生は民間信仰の祭壇跡ではなからうかと考えられると云われたが、ナゾである。かたりべ会員踏査。

第二集かたりべ、薬師神社の前身は狐崎にあった。天正十六年(西暦一五八八年、久慈平九郎こと大浦為信、津軽を侵略統一して東日流安東、阿部一族ゆかりの古事業歴、神社仏閣、三戸南部氏に縁故のある物事をことごとく焼却没収し去ったと云う、勝者のおきてによって、薬師神社の内神として合祀したろうと考証される。編集部及一秋元惣之進記。

第三集かたりべ、往昔には今の小田川が冷水から薬師神社の南側を流れていたと云われる。秋元惣之進記。

山中 長三郎

第四集かたりべ薬師神社は神仏混合の名残り、嘉瀬には薬師神社は二神社あり、一社は鍛冶町南端、もう一社は立山、通称観音山に祀つてある。秋元惣之進。

第六集かたりべ、嘉瀬薬師境内の二ツの石塔の説明あり。木下清一記。右のかたりべ集には薬師コのこと詳しく著されてあります。西暦一九八六年五月、パリで日本伝統工業工芸展開催され、まず人口のテーマ展示として、一方におみこしをおき、他方に仏壇をおいた。そしてこれは日本の二大宗教のシンボルである。おみこしは日本古来の「随神の道（神道）^{カシナガタ}」の象徴である、という説を書いた。このテーマ展示の前では、フランス人観客との間につきのような問答が何度もくり返された。

日本には仏教徒は何人いるか？

一億二千万人だ

では神道の信者は何人いるか？

一億二千万人だ

フランス人は誰もが目を白黒させた。

宗教を厳密に考える彼らには理解できないことだが、現実の日本の姿はそうである。神道は神道のままで、仏教も又仏教としてこの本質的にまったく違つた二つの宗教を、一人の人間が同時に信仰できるのが日本人である。

人口一億二千万人の日本に、一億二千万人の神道の信者がいて、同時に一億二千万人の仏教徒がいる。これは世界中でまったく例のないことだ。この外国人には信じ難い現象こそ、日本

蘇我馬子に殺害されてしまわれる。日本の歴代天皇のなかで、殺害されたと明記されいるただお一人の天皇である。

日本は、どんなに政争が激しい時代でも、天皇だけは殺してはならないという思いがあつたが、この時代にはそうした概念さえ確立されていなかった。天皇には、むずかしい時代であつた。

しかしこのとき、天皇家に大天才が現れた。聖徳太子である。太子は仏教と天皇制度を両立させる道を発見する。いわゆる「神仏儒習合」思想である。

太子「神道を幹とし仏教を枝として伸し、儒教の礼節を茂らせて現実的繁栄を達成する」「神道は敬わなければならない。敬つてなお崇るのが日本の神々である。その崇りを鎮めるものが仏である。だから、われわれは仏を拝まなければならない。」一人間が双方を同時に信仰する道を開かれた。

聖徳太子のこの思想は、神道の否定によって天皇家に代わろうとする野心を持ったであろう蘇我馬子には打撃だったに違いない。太子は政治的にも経済的にも蘇我氏と対立、やがて馬子によって殺害されたという。

太子の知力を以つてしても、蘇我氏を一挙に抑圧することはできなかった。それが実現するのは太子没後二十三年目に起きた。「大化の改新」（六四五年）によってである。

パリで日本伝統工芸展よりここまでのページは、一九九四年発行「日本とは何か」堺屋太一著の概要であります。

国の民族性なのである。

「政治問題化した仏教対策」

仏教の国教化を目指す崇仏派蘇我氏と日本古来の随神の道の護持を主張する排仏派、物部氏と飛鳥時代に起こった戦は日本史における唯一の宗教戦争の例であるという。

聖徳太子当時二十歳で崇仏派蘇我方の一人として従軍され戦勝をもたらしたといわれます。戦に勝つた蘇我氏は崇仏派と見られた崇俊天皇が蘇我氏によって擁立された。

だが、その崇俊天皇も間もなく仏教信仰の政治的危機に気づくことになる。

「神道神話の否定―天皇家の危機」

そもそも天皇家が日本の最高位にある理論上の根拠は、神道神話にある。日本、大和朝廷は天照大神の子孫の神武天皇降臨して建てた国である。その神武天皇の子孫が天皇家だ、という神道神話に依つて、天皇家が日本の支配者となつていく。

この頃には儒教、道教、易姓革命、多様な思想を伝えられていたに違いない。易姓革命の思想からすれば、日本で天皇家の徳が尽きれば、別の家系の徳の高い人物がこれに易つてもよいということになる。仏教が栄え、神道神話が否定されたとなれば、天皇家の地位は崖縁の危機である。

蘇我氏の崇仏派に擁立されて位に就かれた崇峻天皇もそれに気づくと神道擁護の反仏教にならざるを得なかつた。

神道を守り通そうとするとその結果、崇峻天皇は五年後には

第二章

縄文晩期には亀ヶ岡丘式土偶が造られていたといわれる。

岩木山麓に阿蘇辺族 || 津軽中山山脈に津保化族 || 津軽下北に宇蘇利族 || 八甲田山に怒干怒布族が住む。

阿蘇辺族は岩木山「大森山」の噴火に、宇蘇利族は恐山噴火、怒干怒布族は八甲田山の噴火に各々の族はお方滅亡する。

津保化族だけは噴火のない中山山脈に比較的安泰に生伸、飯詰から油川街道へ向う中山山脈の分水嶺付近の津保化沢、中山山脈の大倉岳、梵珠山を舞台にして、阿蘇辺族、中国人「普の文化文明の物質を持つて津軽に上陸」及九州地方を統一された、日向族との戦に敗れ去つた安日彦王、長髓彦王の一族等と津保化族と同化され文化の高い荒吐族となり、津軽一帯に縄文―弥生―古墳時代と長い年月によって広がつたといわれる。

「青森市、三内丸山遺跡も津軽全般に亘つての縄文遺跡に關連してくるのではないだろうか。」

中山山脈は噴火もなく、古代植物も動物も絶えることなく、寧猛な獣も比較的少なく、狩猟にもてきた、安楽の地であつたのかもしれない。

荒吐族―安東を蝦夷と軽蔑し、まつろはざる民と見た、大和朝廷と長期にわたり戦うも蝦夷「荒吐族」敗れ大和朝廷の民となる。古代 || 縄文 || 津保化族の足跡とされる梵珠山の聖地―飯詰山の津保化沢聖地―大倉岳の聖地―亀ヶ丘の聖地―岩木

山の聖地—恐山の聖地、これらの津軽古代のロマンのふくむ「日本海は津軽海峡や他の海峡のできる以前は湖のように海流も暖かで舟で大陸からの来訪者もあり、陸づたいにも北方と南方から人類、文化の留埫であったが海峡が生ずるにともない小規模となったといわれる」

これらの地区からも歴史的、貴重品を発見される日も来るであろう、津軽の大ロマンでもある。

津軽の歴史物はおおくはニセ物との批評者もいる、しかし大和朝廷の歴史はすべて真実ばかりだろうか、古代になるほど疑わしい。「天地開闢以来の出来事を綴ってロマン豊に描く我が国最古の史書『古事記』は奈良時代初めの和銅五(七一二年)天武天皇の命を受け、碑田阿礼の暗唱する古い出来事を太朝臣安方侶が撰録したという。

阿礼は当時二十八歳の舎人で女性かともいわれるが詳細は不明である。おそらく語り部のような職掌であろう。

安方侶も文献や墓誌から実在が確認されている。内容が三巻に分かれ、上巻は神代—中巻は神武天皇から応神天皇まで下巻は仁徳天皇から推古天皇までの歴史をおもに書かれて私等は学校で教わったのである。

歴史物は半信半疑により、発展されて来られたらう。

半世紀前の津軽の村々にはゴミソ「祈禱師」イタク「霊謀師」オシラ「占師」が栄え縄文からの神への信仰の残りであろう、現世の仏にも神にも又惑う信仰者がおおいと思う。

石器時代よりの単純信仰にも心してみることも、新しい信仰のしかたも生まれるだろう。

第三章

私の幼少の頃に明治生れの故鎌田稲辰氏の父に首の腫れ物を切開された記憶がある。六十数年たった今も左耳の後首に切開の傷痕がある、そうと大きな腫れ物であった記憶はある。

鎌田家は代々薬師コ信仰者であり、薬師コ講中に訪れた僧より切開の技術を教わり身に付けたといわれる。又、畑中町内の土岐保友の祖母も明治生れで薬師コへの信仰は深く、目の診療が上手な方で幾度か診療して貰いました。

診療の方法は、私を神棚の前に座らせ、薬師コより授った神石を拝み、十センチほどの長さの葦で瞼の裏側に付着された。

病いの物体を掻取り除く、又薬師コ入口の北側の近くにあった霊水の湧く小井戸「当時は村人も使用され、近年までであったが今は埋められている」より汲んでおかれた霊水で目を洗浄してそのあとに目薬を点眼する。

さらに神石を拝して神石を手に取って見ながら神石の汗の輝きが強いほど治りが早いという私は二度ほどの診療で治りました。

敗戦後神が呼んだのか仏が仏を呼んだのか、或る夏の日、薬師コの松陰に六部「法華経六十六部を書き写し一部ずつ全国の霊場へ納めるために諸国巡礼」出発の時は銭食は身に付けず、

托鉢のみにて歩き続ける」の行脚僧のことで六十六を略して六部と云う、室町時代に始まったと云われる。

その六部が休んでいた。私の他に二、三人の鍛冶町の人がいましたが、誰れだったか思い出せません。傍に嚙が置かれ、中には写真、人形、絵、着物の切れ端し此れ等の品々は若くして死んだ人、又、悲しい運命により逝去された者達の遺品である。多くの人々に見てもらい、神社、仏閣の巡礼により浮かばれぬ霊を浮かばせて冥界へと旅に立たせる役目も負わされているといわれる。

薬師コは昔昔は殯の森であり、死骸を鳥りに啄吸ませ、遠い神の国に運ばせたと申します。あるいは腐蝕させ自然に還す遺骨は神水の湧く小井戸か境内の南を流れる大堰で濯ぎ境内の石の立ち並んでいる所か他の何処に埋葬されたという。

薬師コ付近に住む親友山中林一氏の話しによると何百羽のカラスの群れが薬師コの森に時々逼まることがあり、何んの為にかと訝しがつておりました。

敗戦前後にかけて小田川温泉登り坂の右にある三左エ門溜池は水が澄み立派な自然氷りを造られていた場所である。

又、嘉瀬観音山登り坂左り下も清水の湧ッボがあり現毛内醬油店の前身造酒店では大寒に入ると酒仕込みの水は観音山の清水を用い「観音正宗」として銘酒の名が知れ渡っていた。

当時は毎朝、酒店の主人は礼束を机の上に並べ日の出と共に拝したと、雇われ人の話しである。その後酒店の主人が山師

「鉦山」事業に手を出し失敗する。

昔は小田川温泉及観音山の山々の源泉が冷水町を通り薬師コに至り大堰小堰は清水が湛然として流れいたであろう。私の十五歳頃に小田川下流の十川土堤付近の田は、上の田が水を使用する時期になると水不足のため田植えもされぬ状態となる。

そこで年中田に水を入れ泥田にして水の干らぬように工夫する、泥田にすると、水の量も乾田の五分の一ですむ長年泥田作りにすると泥が腰辺の深さになり、田起しも田掻きも馬を用いられず、人力の鍬で起す。苗も水不足で自噴井戸、掘抜を作る。

私は掘抜道具を運びに行ったことがある。井戸掘りの職人の話しによると、自噴する水は明治時代に中山山脈に降った、雨水が地下に深く浸透され百年の歳月に至り低い此地に流れくる水を六十メートルほどを掘って自噴させる。

自噴された水で作った米は体に非常によいのだともいわれた。なぜならば、温泉風呂が病軀によいのは、長い歳月を鉦物や色々の物質の中に浸りながら潜流して色々の成分に染って湧き出るからである、職人の掘る掘抜の水で作る米も又体によいのだそうである。

職人の話しもうまさに感心するばかりでありました。「現時代にも成分により科学的にも、治療に効力ある霊水があるといわれます。」

薬師コの小井戸の霊水も昔は本当に効力があり、長年に渡り村人は利用されたのである。

薬師コは縄文—弥生—古墳時代の津保化族は殯りの森として祈り、大和—奈良の荒吐族、安東、蝦夷は磯崎宮として拝し、奈良—平安—鎌倉—室町と仏教の栄えるに従い薬師神社となり今日に至る。縄文、弥生、古墳、大和と長期に渡り津保化族や荒吐族飯詰山に当時としては高い文化生活をして住んでいたならば、嘉瀬の里も比較的よい生活していたと考えます。

昭和八年頃私の家に農閑期は畑中の町内のお母さん連中が集る、大寒に入ると、台所の囲炉裏の焚火を囲んで藁仕事をします。お母さん連中は明治生れ、子供の頃に学校に行けず子守と家事の明暮れで育つ当時は無学に近い人が多く、囲炉裏のわきの壁には富山の置き薬りを渡して歩く人より貰った、花暦が貼られてあります。

花暦は季節、季節に咲く花で一年を表した暦み。

一月、つばき。 二月、うめ。
三月、たんぽぽ。 四月、やまざくら。
五月、ぼたん。 六月、あじさい。
七月、ひまわり。 八月、ききょう。
九月、すすき。 十月、きく。
十一月さざんか。 十二月つばき。

これは東京地方の花暦の一例である。その地方によって花は違わらしかつた。

花暦はお母さん連中は昔から利用されて来たといわれる。一枚もので大きく、煤で汚れてありますが、台所の色彩とい

えば此の花暦だけである。ガラス窓は六十センチ四方一ヶ所、しかも雪の降る日には大部分雪に埋れ粉雪が吹着すると薄明りしか入らない。

囲炉裏火の煙りは家中に充満して、台所は暗く戸外から入った瞬間は誰れが居るのか様子はおぼろげである。暫くすると目が暗さに馴れ、しだいに様子も現れてくる。

私達子供の頃はお母さんの家は低く、雪に覆われ煙は家中を漂よって目の患う者が多く、小学校では下校時刻にトラホーム患う生徒が列をなす、校長先生が目をも、大きなトックリにゴムホースの付いた容器が吊され、なまぬるいお湯で校長先生が目を洗浄してくれた感覚は忘れられぬ。

家庭に電灯は一個だけ長い電気の紐を輪に巻き台所の中央に垂れ下げておき一ヶ所の電灯で家の内外の全域に使用されます。

昼る私が外より遊んで帰ると凍った裾を溶かすために炉縁の灰に板切れを敷き、その上に足を乗せ炉縁に腰を掛け裾を乾しながらお母さん連中の囲炉裏辺のはなしコ冗談あり、空想あり、真実ありの談話を聞かされた。

又、お母さん連中の子守唄は、かならず泣けば山から蒙古アくるねの一節が唄われる。飯詰山には蒙古軍が難航され津軽の何処かの海岸に上陸して飯詰山に辿り着き村人に悪さをしながら住んでいたといわれる。その蒙古沢の地名はいまも存在するという。又、子供頃に悪いいたずらをするとお父さん連中に、この津保化わらし「童」と叱られた思いがあります。

飯詰山には津保化沢も存在され、その一角に石塔山大山祇神社があり、十三年ほど前にかたりべ一行の一員としてその祠に参詣しました。

今では整備され歴史物も少々展示されてあるらしい。

明治生れの人と大正生れの人「百姓、農作業をする人」は結婚され子ができると、男はアヤ、女はアパと呼び又、二人称の汝、君はナと呼び一人称の自分、私はワと呼んでいた。

敗戦後に津軽に来られ金田一京助先生か春彦先生かは忘れたが、津軽弁を軽蔑するべきではないと申され、又、新聞にも書かれ、言語界の大先生が誉めてくれたのである。

「カップ—水神」「ヒポド—火神」「マコウ—金神」「イベカモ—産神」「タタラー—山神」「モクリ—土神」「タケリ—海神」「イカル—川神」「カモ—男神」「イッヒ—女神」「メゴ—子神」「ダミ—死神」「マタギ—狩神」「ウナギ—漁神」「ノラド—農神」「タダラー—戦神」「ミナド—水神」「バゲ—夜神」「ヤメソ—衣神」「カマド—家神」「セモチ—飢神」。

カッコ内のカタカナは縄文—弥生—と綴っていた荒吐族の神の名称であるという。明治生れのアヤ、アパと大正生れのアヤ、アパの私等とは近年まで神の名詞としてではなく普通の物事の代名詞として日常の会話におお方用いられた言葉である。

今日ではほぼ死語となつてしまわれました。私の若い頃は田打作業をモクリ起し、田の中に水を入れて土の塊りを砕く「田植え」するために馬鍬で一番に三回掻くこともモクリ掻き申さ

れ、他家で何かをす、お金儲をすると、アソコの家でモクリ起したといわれ、子が生れるとメゴ生れた、お正月に貰うお金はマコである、囲炉裏はヒポドと呼び、葬式はダミと申された。田の中に水を流し込み過ぎて畦を漏れ出るのはイガル、大雨が降り田圃が洪水するのもイカルといわれました。

野も里も、雪は消え、春下旬となり田打桜も咲き野良は田打「田起し」の真最中である。

縄文遺跡を歩み、阿蘇辺族の里、岩木山の頂を仰ぎ見、津保化族—荒吐族の里、中山山脈を遙かに望み、津軽野の絶景に浴す時、日本人は誰れしも、まほろばの里「もつとも優れた地域」と賛美するのである。

「平成十年度」

倭建命が戦に敗れ帰りの途中、三重の村にお着きになったとき、ひどく疲れてしまって一歩も前進できなくなり、故郷の大和（奈良県）を偲んで、次のようにお歌いなつて三重村の地に果てたとされます。

「大和」、倭は 国のまほろば、

たなづく青垣 山隠れる

倭し、うるはし